

令和元年度 「地域共生社会推進セミナー」 報 告



日時:令和元年(2019年)12月5日(木)

場所:アイリス愛知2階 コスモス

令和元年度 地域共生社会推進セミナー 日程表

開催日：令和元年12月5日（木）午後1時30分～午後5時

会場：アイリス愛知 2階 コスモス

時間	次第	内容
13:00	受付	
13:30～	開会	
13:30 ～14:30 (60分)	I 講 話	<p>『地域共生社会の捉え方に関する一考』 ～気遣い合える森の住人として～</p> <p>【講師】 愛知教育大学 教育学部 教授 川島 ゆり子 氏</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>川島ゆり子（かわしまゆりこ） 関西学院大学博士課程後期課程満期退学 博士（社会福祉学） 日本地域福祉学会理事、日本福祉教育・ボランティア学習学会理事、 日本社会福祉学会学会誌編集委員 愛知県社協コミュニティソーシャルワーカー養成講座講師、大阪府地域福祉コーディネーター 養成研修講師、その他講師活動や市町村での審議会委員等を多く務める。 『地域を基盤としたソーシャルワークの展開』（単著、ミネルヴァ書房、2011） 『地域再生と地域福祉-機能と構造のクロスオーバーを求めて-』（共著、相川書房、2017） 『しっかり学べる社会福祉③ 地域福祉論』（共著、ミネルヴァ書房、2017） 『持続可能な地域福祉のデザイン-循環型地域社会の創造-』（共著、ミネルヴァ書房、2016）他</p> </div>
(5分)	休憩	
14:35 ～15:45 (70分)	II 事例報告会	<p>『きづかう・しりあう・やってみる～地域共生社会の実現に向けて～』 【コ-ディネ-タ-】 愛知県社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会 委員長 鈴木 盈宏 氏 (公益社団法人スペシャルオリンピックス日本・愛知理事長)</p> <p>【助言者】 愛知教育大学 教育学部 教授 川島 ゆり子 氏</p> <p>【報告テーマと報告者】 「家庭・子どもを孤立させない保育所等の取り組みについて」 社会福祉法人明照保育園 理事長 中島 章裕 氏 「まちイチ活動の取り組みについて」 名古屋トヨペット(株)総合経営企画室担当 副課長 豊嶋 洋史 氏 「行政と社協による地域活動の立ち上げ支援について」 豊田市役所福祉部福祉総合相談課 主査 江崎 崇 氏</p>
15:45 ～17:00 (75分)	III ネットワークタイム	<p>～きづかう、しりあう、やってみるきっかけをつくる～ 福祉分野（公・民福祉の関係者）、産業（民間企業の関係者）、学校（教育・研究機関関係者）、官公庁（国・地方自治体関係者）、ボランティア、地域住民、NPO、自営業者等、参加者皆さんによる新たな出会いの場、新たなアイデア発見のきっかけづくりのための交流会。</p>

（会場案内）会場へお越しの際は、公共交通機関をご利用ください。

シンポジスト 事例発表【1】

家庭・子どもを孤立させない保育所等の取り組みについて

社会福祉法人 明照保育園 理事長 中島 章裕 氏



戦前から農繁期の託児所として開設されてきた本園は、当時、どなたでもおいでくださいという看板を上げていたそうです。そして、明照保育園として、昭和28年に創立されました。

心身ともにたくましく、思いやりのある子どもを育てることが、創立以来の本園の保育・教育目標です。特に昨今、地域社会のいろいろなつながりの弱さにより、孤独な中での子育てが困難になっています。地域社会の足りないところを補って、子育て環境を整え、親子の健全な成長を図ることを大切にしています。

随分前から障害児指定園になったのも、児童クラブや不登校支援を始めたのも、この理念によります。

本園は、ずいぶん前より、子育て支援に力を入れてきました。園庭開放や親子広場には、毎回40組以上の親子の参加があります。なぜこのような活動をするようになったかということ、ここにこの開設当初に見学をさせてもらったところ、親子同士の交流が少ないことに気付いたからです。何十組も親子がいるのに、一緒に関わって遊ぶ親子が少なく、皆さんバラバラに遊んでいる感じでした。そこで、保育園の子育て支援の経験から、親子だけで遊ばせるのではなく、保育士として少し手助けするだけで、随分と雰囲気が変わることも分かりました。ちょっとした手助けがあれば、子育てを楽しめるお母さんはたくさんいます。反対に、そのちょっとした手助けが得られないために、子育てに負担感を感じているお母さんもたくさんいます。

月1回の土曜日には「なかよし保育」と称して、この日は園児だけではなく、地域の小、中学生や、お年寄りなどのボランティアが、いろいろな遊びのコーナーで交流できる場を提供しています。ここでは子ども食堂の一環で、学校から紹介のあった小中学生の子たちは、給食費が無料となっています。

中学校3年生との保育交流は、もう30年近く続いています。大人と子どもが半々のこの時期に、今やなかなか触れることの少なくなった幼い子どもと肌で触れ合うことは、将来、自分が親になっていくことを全身でイメージする貴重な体験ではないかと毎年思っています。本園の職員の中にも、この保育交流に来ていた子が何人もいます。

地域における広域的な取り組みとして、平成26年度6月より、毎週木曜日に「子ども食堂おとなりさん」を本園で行うようになりました。現在は毎回40人前後の利用があります。本園は昔から子育て支援や、育児相談に力を入れてきましたが、みんなで一緒に食べるだけで、自然と笑顔になり、心が温かくなるのを感じます。

貧困対策や子どもの居場所づくりとして全国的に広まっている子ども食堂ですが、経済的なものに限らず、孤独な子育てや、時間に追われた日々のストレスを軽減する、大きな意義があることをやってみて強く感じました。

援助を必要としている子どもや、一人親家庭といった優先順位がありますが、午後6時すぎのお迎えの家庭や、一度、家に帰ってから再び晩ご飯を食べに来る親子もいます。子どもだけではなく、食事をしながら、職員や保護者同士でも楽しい会話が交わされます。

毎晩、子どもと自分だけでは息が詰まることがあると漏らす家庭にとって、木曜日の夜は、お互いの息抜きの日としても活用されているのです。

今後の展開としては、社協や民生、児童委員さんとの連携も必要だと感じています。福祉分野でさまざまな活動を行い、情報を持っている社協や民生、児童委員さんとの連携は必須になってくるでしょう。現在は、社協さんのフードバンクや、地域の企業、農家からの援助も始まりました。

7年ほど前に、豊橋市で4歳の女の子が、親のネグレクトにより衰弱死した事件がありました。この家庭は子どもが2人いたのですが、小学校にも保育園にも行っていませんでした。近所との付き合いもなく、そもそも近所の人たちに聞くと、子どもがいたことさえ知らなかったんだそうです。

この家族が住んでいた場所は、本園から直線距離でいうと300mぐらいの所です。こんなに近くに困っていた家族がいたのに、私たちは気付くことができませんでした。

私たちはアフリカの飢餓で苦しむ子どもたちや、災害によって苦労している人たちには、見えていて同情もしますが、地域の子どものことは、意外と見えていないということです。「見えない貧困」という言葉があるように、現代、貧困や困っている人は見えにくくなっています。気付いたとしても、安易に親や家庭のせいにして納得してしまっているかもしれません。ひょっとしたら、身近な地域のことには、気付こうとしない、見えないようにしているといった側面もあるかもしれません。

気付こうとしなければ、見ようとしなければ、何も知らないままこの世界は進んでいきます。ネグレクトで亡くなった4歳の女の子に、私たちは何もすることができませんでした。その反省を踏まえて、園として何ができるだろうかと常に考えてきました。まだまだ手探りの状態ですが、本当に少しずつですが、手応えも感じています。